



# 蘇る、蒲生の自然

蒲生干潟と海浜

12月号

## 冬間近な蒲生干潟

11月16日撮影



## ハママツナの群落の境界

11月20日撮影

### 陸地側の植生地

枯れたアシの群落

枯れたハママツナの群落

### 干潟の対岸の植生地

何も生えていない土壌

枯れたアシの群落

枯れたハママツナの群落

アシの群生地とハママツナの群生地の境がはっきりしています。土壌には、どんな違いがあるのでしょうか？

干潟の対岸のアシの群生地の水際に、ハママツナが群生していない土壌があります。

また、干潟の対岸のアシの茎丈は陸地側のアシの茎丈の半分ほどの高さです。

ここにも土壌の違いがあるのでしょうか。



干潟の対岸のハママツナ

11月20日撮影



干潟の対岸のハママツナの群生地には、アシ以外の海浜植物が群生しています。

また、ハママツナの群生地の中に紅葉しているような海浜植物が群生しています。これがハママツナであるかどうかは不明です。

枯れた海浜植物

11月20日撮影





今も緑の海浜植物

11月20日撮影



5月撮影

ハマエンドウ



5月撮影

ハマヒルガオ



9月撮影

ウンラン



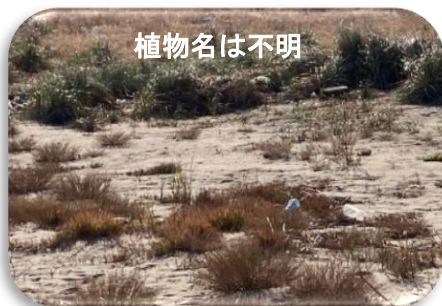
植物名は不明



ケカモノハシ



ハマニンニク



植物名は不明



砂地、強風、そして潮風が吹く厳しい環境の中で生息する海浜植物の生命力の強さに驚かされます。



クロマツ



この時期も緑の葉をつけた海浜植物は、このまま枯れなければ来春もまた同じところに群生するはずです。枯れた海浜植物は、来春はどうなるのでしょうか???



カニの種類の多くは巣穴で冬眠します。



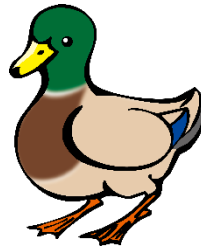
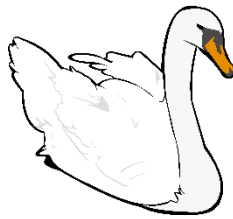


冬を迎える蒲生干潟の野鳥



北端の干潟の野鳥

干潟には一年を通じてさまざまな野鳥が飛来してきます。これは干潟に餌になる生物が多いからです。ゴカイ、貝、カニなどが生活し、また潮の干潮によって河口の魚や海の魚が出入りします。そのため蒲生の干潟は、ほかの地域では見られない動物の生活が観察できるととても大切なところです。



蒲生干潟の冬に見られる野鳥の多くは、ガンやカモの中間です。これまで、マガモ、コガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、そして国の天然記念物のコクガンなどが確認されています。



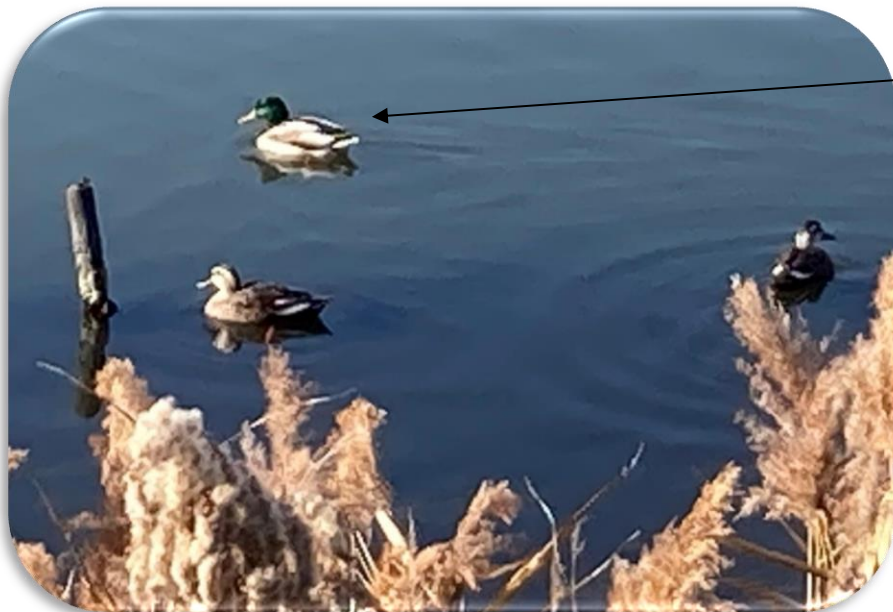
日和山前の干潟の野鳥



七北田川河口の野鳥



識別できた野鳥



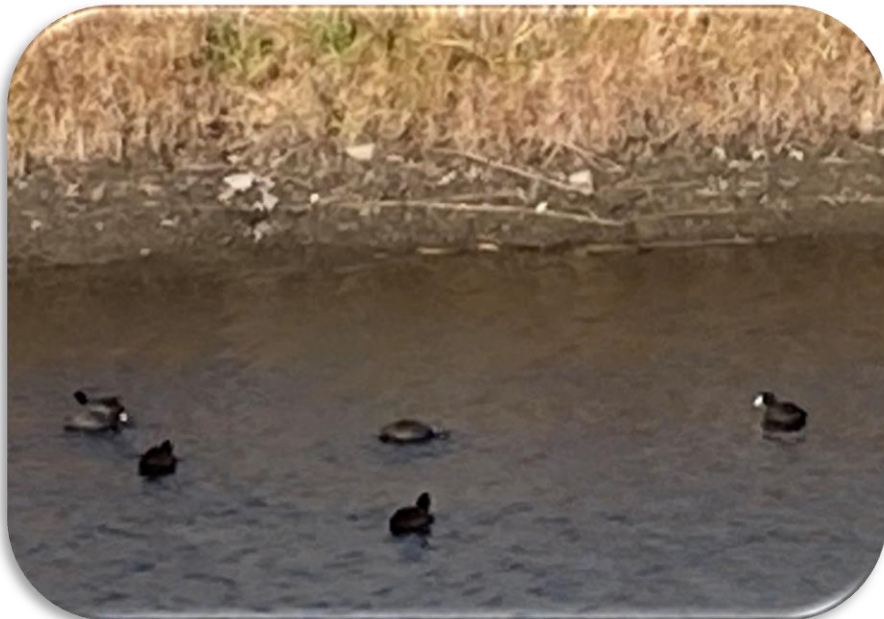
マガモ (WEB 画像)

主に冬鳥として湖沼、池、川、海岸に渡来します。雄の頭は緑色光沢のある黒で白いくび輪があります。雌は褐色で黒褐色の斑があります。



オオバン (WEB 画像)

主に本州中部以北の湖沼で繁殖し本州以南で越冬します。分布は局地的です。体が黒く、額と口ばしが白いです。水上生活を主とします。



カワウ (WEB 画像)

木の上にコロニーを作ります。分布は局地的です。本州以南では漂鳥または留鳥。カワウの背面は褐色で、緑色のウミウと見分けます。



## 余談① 白砂青松になる前の日本の海岸は？



昔から、日本の美しい海岸は「白砂青松」と言われてきました。人気の海水浴場の背後にはクロマツ林があり、世界自然遺産に指定されているところもあります。

震災前は、防潮堤の陸地側（日和山の背後）にはクロマツ林がありました。今、そのなごりの一本のクロマツが生えています。

元々、日本の海岸の松林は、藩政時代に防砂林、防風林として植林された所が多いと聞いています。では、植林される前の海浜には蒲生海浜のような植物が分布していたのでしょうか。

防砂林、防風林としてクロマツの植林をした海岸があるのは確かです。蒲生干潟は多くの動植物が生活し、豊かな自然を育んでいます。カニや貝がたくさん生息していますが、海水の浄化に役立っています。たくさんの生き物がいるおかげ多様な植物が生育できているのも確かです。そして、多くの動植物に引き寄せられてムシや鳥たちも集まってきています。

マツが植林される前の姿が必ずしも蒲生のような姿とも限りません。荒れた土地に手を加えて整理した土地もあるかもしれません。ただ、干潟という場所は蒲生に限らず、**人の手を加えず生物多様性を維持**しているのも確かです。



クロマツが植林される前の海岸の植生の分布図が存在しないので、あくまでも想像するしかありません。きっと、蒲生の海浜のような植生に近かったのではないかと想像しています。

生物多様性を維持している干潟。大切にしていきたいものです。

### 日本の三大松原





蒲生にも松林がありました

かつてのクロマツ林



震災前まで、蒲生にも松林がありました。地域の人たちの憩いの場所でした。下の写真は津波で流されなかった松です。

1980年代頃の蒲生



余談② 開発以前の日本各地の低湿地帯の風景は？



かつての大阪の道頓堀境界は、低湿地帯だったようです。江戸時代初期、そこに広がるアシ原を開削して運河（道頓堀）をつくり、大阪湾からの水運に役立てたそうです。

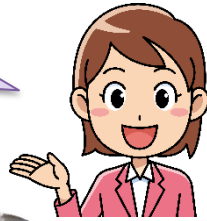
「けろり道頓」（司馬遼太郎著）で、道頓堀開削工事前の葦原の様子を知ることができます。



東京スカイツリーの所在地は墨田区押上です。天声人語に「東日本に多い押切という地名は、大量の水により堤防が押し切られたことを示すのではないか。地名についての著作が多い楠原佑介さんが、そう書いている。押川、押沼、押堀、押戸、押田などの名にも同じような由来が考えられるという。」とありました。押上も同じような由来と思われます。隅田川境界もアシの群生地だったようです。



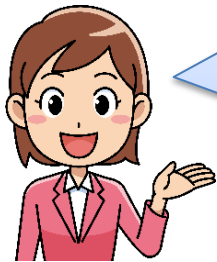
多賀城市を流れる砂押川にも「押」の字が使われています。同じ由来でしょうか？



川の両岸には、川の氾濫を防ぐために、高さ3mほどの堤防が築かれています。



満潮時の水位は沿道と同程度



砂押川の河原にはアシが群生しています。堤防が築かれるまでは、その境界は川が氾濫して湿地帯だったと思われます。現在、住宅地になっているところにも、かつてはアシが群生していたことでしょうか。このアシ原は、遷移の最終段階の極相に近いのでしょうか。



遷移の極相と思われるアシ原に、北米原産の帰化植物セイタカアワダチソウが生えています。近くのJRの軌道脇に生えているセイタカアワダチソウの種が運ばれてきたのでしょうか。



ここのアシ原には、セイタカアワダチソウ以外の植物も生えています。アシ原の景観が変わってきたようです。

